

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:108-109.

長期入院となった子どもをもつ父親の生活の変化の実態と医療者に対するニーズ

及川 冬華, 三浦 有穂子, 北出 瑞貴

# 長期入院となった子どもをもつ父親の生活の変化の実態と医療者に対するニーズ

旭川医科大学病院 4階西ナーステーション ○及川 冬華 共同研究者 三浦 有穂子 北出 瑞貴  
 キーワード: 長期入院、父親の心身の負担、父親に対する看護

## I. 目的(はじめに)

A 病院小児病棟では母親が付き添い者であることが多く父親が入院生活に直接関わることが少ない患児の入院中、父親は仕事を続け、さらに家事や同胞の育児もこなさなければならない。そのため面会時間は限られ、医療者とのコミュニケーションの機会が少ない。また父親は、入院している子どもと母の精神的・身体的サポートの役割も迫られるが、父親自身の負担が増える中での休養の時間は十分にとれず心身ともに厳しい状況になると考えられる。そこで、長期入院となった子どもをもつ父親の生活の変化の実態と医療者に対するニーズを明らかにし、看護について検討したいと考えた。

## II. 方法

平成 26 年 4 月～平成 28 年 7 月に、A 病院小児病棟に 2 週間以上母親が付き添い入院していた子どもの父親 89 名を対象に、質問紙調査を行った。質問紙は平成 28 年 10 月 31 日に郵送配布し、平成 28 年 11 月 10 日集計した。対象となった父親に質問紙を配布した。質問項目として①家族構成、②父親の仕事、③家事育児の時間の変化、サポート体制、④父親の体調の変化、⑤兄の入院中の家族間の話し合いの有無、父親の面会の頻度、⑥父親の思いや医療者に対する要望について、自作の無記名自記式の質問紙を使用した。分析方法は、調査内容は単純集計し、自由記述内容はコード化し同質性に基づいてカテゴリー化し質的帰納的に分析した。

## 倫理的配慮

対象者には研究目的及び方法とプライバシー保護、守秘義務、研究協力への自由性、研究終了後には一定期間データを保存し破棄すること、研究結果の公表について書面で説明し、質問紙の提出をもって同意とした。なお、本研究は対象施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結果

質問配布数は 89 名で、回収は 33 名(回収率 37%)であった。子どもが患児のみの一人である父親は 14 名(42.4%)患児以外にも子どもがいる父親は 19 名(57.6%)であった。子どもの年齢は 0～21 歳であり、同胞の年齢は 0～30 歳であった。

### 1. 父親の生活の変化

#### ①家事について

子どもの入院中、家事に費やす時間が増加した父親は 21 名(63.6%)、減少した父親は 1 名(3%)、変化なしは 9 名(27%)であった。育児については患児に同胞がいる場合のみとし、育児に費やす時間が増加した父親は 9 名(47.3%)、減少した父親は 6 名(31.5%)、変化なしは 4 名(21%)であった。

#### ③身体・精神面について

患児の入院前と入院中の父親の体調の変化を尋ねた(複数回答可)。同胞の有無で比較すると患児に同胞がいる父親は身体面、精神面ともに入院前と比較し症状が出現していることがわかった(図 1、2)。また身体面において、就学前の同胞がいる父親は疲れやすいと回答している割合が多かった(図 3)。入院前と比較し睡眠時間が延長した父親は 0 名、短縮したのは 10 名(30.3%)、変化なしは 22 名(36.3%であり、同胞の年齢別で比較すると、患児に就学前の同胞がいる父親の睡眠時間が短縮されている傾向にあった(図 4)。

図 1: 身体面の変化(同胞の有無での比較)

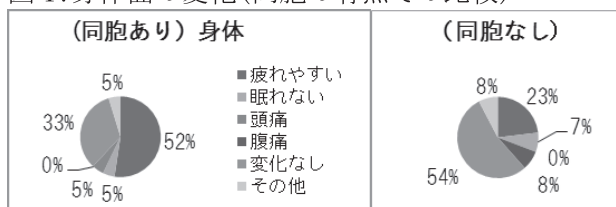


図 2: 精神面の変化(同胞の有無での比較)

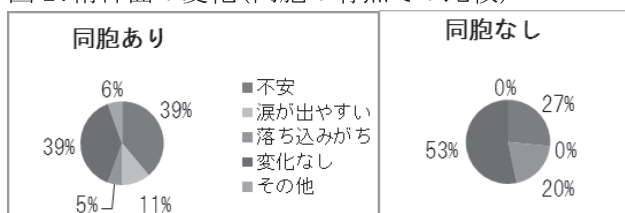


図 3: 同胞の年齢別にみた身体面の変化

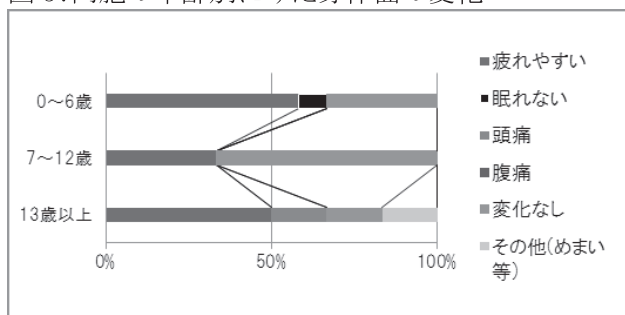
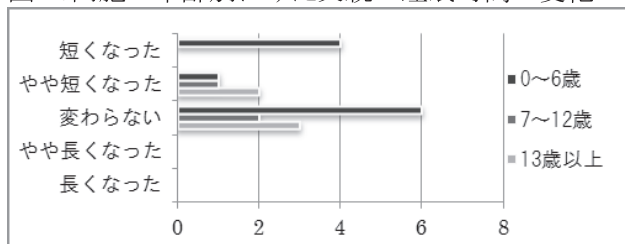


図 4: 同胞の年齢別にみた父親の睡眠時間の変化



#### ④面会

面会頻度は週 1～7 回であり、A 市内、市外で大きな差は見られず、面会のタイミングは退勤後、休日がほとんどであった。面会したいが、できなかった経験がある父親

は半数であり、理由としては遠方であることや、同胞が幼く病室に入れないことなどが挙げられていた。

#### ⑤家族間の話し合いについて

患児の病気の治療や状態については、ほとんどの父親が定期的に話し合うことができたと答えていた。

#### ⑥医療者に対して

医療者に対し父親自身の要望・希望を直接伝えることができた、もしくは妻を通して伝えることができた父親は26名(78.7%)、希望・要望がなかった父親は5名(15.1%)、伝えたいことがあったが伝えられなかった父親は2名(6%)であった。

自由記述内容は得られた文章から18コードに分類し、これらのコードから「家事に対する苦労」「育児に対する苦労」「患児の心配」「医療への要望」「医療者への感謝」という5つのカテゴリが導きだされた。

### V. 考察

橋爪ら<sup>1)</sup>の研究では患児の入院中に父親が家事と育児に費やす時間は増加しており、本研究でも同様の結果が得られている。このことから、父親は支援者の有無に関わらず、経済的役割以外に家事や育児を自身の役割として強く認識していることがわかった。そのため、支援者がいても頼ることができず、自身の負担が大きくなっている可能性がある。杉野らは、「母親は父親が入院前まで担っていた役割を果たしてくれることに感謝しているが、父親の役割負担が増加していることで、父親に情緒的サポートを求めることができない状況になる」<sup>2)</sup>と述べている。つまり、父親の役割の増加は父親の負担となるだけではなく、母親の不安や悩みを増加させることも考えられる。父親が自宅での家事や育児についても相談できる機会を設け、負担が増加している場合には周りの協力を得ることが必要であることが示唆された。

高橋らは「患児が安定して入院生活を送るためには母親の心身の安定が不可欠である」<sup>3)</sup>と述べており、父親は母親を心身ともに支える役割が期待されている。しかし本研究では身体・精神面において、疲れやすい、不安があると感じている父親が多く、患児に同胞がいる父親ではその症状が出現している傾向にある。睡眠時間の変化においては就学前の同胞がいる父親の睡眠時間が短縮している傾向がみられたことから、未就学児は自分で身の回りのことができず、様々なことに時間を要することが予測されるため、育児時間が増加、睡眠不足につながり身体的な症状として現れていると考えられる。また串崎らは、母親が不在になることで同胞に反抗的態度や退行現象がみられたと指摘している。今回の研究では同胞の変化については調査しておらず結果として出ていないが、入院が長期にわたると予測される患児の同胞には前述したような負担や影響が出る可能性があることを認識し関わるが必要である。入院中も母親と同胞の時間を作れるように配慮するなど、同胞の情緒的安定のために家族で過ごす時間を持てるよう意識的に関わるのが大切であると考えられる。

杉野らは患児と家族が安定した闘病生活を構築するためには、父親と母親が支えあう関係の維持が必要であ

り、夫婦が離れていて対話の時間や場がないことは夫婦間における感情のズレを増強させると指摘している。本研究では、面会に来られなかった父親はほぼおらず、夫婦間での話し合いも大多数ができていたと回答が得られた。現代は大多数がスマートフォンを所持しており、病室であってもメールなどのやり取りが可能である。連絡を取りやすい環境があることも、夫婦間の話し合いを定期的に行うことができたという結果につながったのではないかと考えられる。しかし当病棟では大多数の患者は4人部屋に入院することになり、病室での夫婦間の会話が十分にできない状況が考えられる。今回の研究では、母親に対し夫婦間での話し合いができていたかについての調査をしていないため、杉野らが述べていたように母親が父親に対して情緒的サポートを求めることができず、思いを伝えられていなかった可能性がある。また当病棟では同胞の面会制限があることで同胞のいる父親は面会することが困難となることが予測される。このことから、父親は限られた面会時間のなかで母親と子どものニーズを満たすことができていたかは不明である。そのため、父親の面会時には夫婦間で十分な話し合いができる時間や場所の確保を行うことが必要であると考えられる。父親は仕事もあり、面会に来る時間も限られていることから患児の病状や治療方針について情報を得ることが困難となることが予測される。夫婦の物事の受け止め方に相違があることも感情のズレを増強させる原因になると言われていることから、夫婦間で患児の状態や退院後の生活について話し合う際に、理解の相違がないよう援助する必要がある。看護師は付き添いする母親だけでなく父親に対しても患児の疾患や退院後の生活についてパンフレット等使用し知識獲得の手助けを行うことや、医師からの説明時には父親の参加を促し時間調整を行うことで夫婦間における感情のズレを防ぐことができるよう意識的に関わる必要があると考える。

### VI. 結論

1. 父親は、子どもの入院中に家事や育児時間が増加し、身体・精神面の負担も増加することが考えられた。また、患児に同胞がいる父親は身体・精神症状が現れやすい傾向にあった。
2. 医療者は入院している子どもに付き添う母親だけではなく、父親の生活状況や身体・精神面にも配慮し、両親での対話の時間も意識的につくるのが重要である。
3. 両親は入院中の患児の病状や将来について、また自宅にいる同胞の精神面など様々な不安や心配があるため医療者は両親の思いを傾聴し、ニーズを把握した上でサポートしていくことが重要である。

### 引用文献

- 1) 杉野健士郎, 前田貴彦, 臼井徳子: 幼児期の小児がん患児に付き添う母親が父親に抱く思い, 三重県立看護大学紀要, 第14巻, p33-39, 2010
- 2) 高橋泉, 田原幸子: 母親の心身の安定化と父親への関わり, 小児看護, 第17回, p1511-1514, 1994